

大学院助産師教育における産育習俗探索（フィールドワーク）の実践報告

石村美由紀* 佐藤繭子* 道園亜希* 小林香華** 久我美里**
内山絢佳** 井浦 碧** 古川愛梨**

A Report on the practice of childbirth and childrearing customs fieldwork in midwifery education at the graduate school

Miyuki ISHIMURA Mayuko SATO Aki DOZONO Kanoha KOBAYASHI Misato KUGA
Ayaka UTIYAMA Midori IURA Airi FURUKAWA

要 旨

福岡県立大学大学院看護学研究科助産実践形成コースの講義「コミュニティ助産学演習」の2コマとして「産育習俗探索（フィールドワーク）」を取り入れた。助産師として産育習俗や神事を理解し、地域で生活する母子とその家族を支援するための方法を探索することを目的としている。

「産育習俗探索（フィールドワーク）」の場所を、福岡県内にある宇美八幡宮（福岡県糟屋郡宇美町）とし、学習した内容について報告する。なお今回の産育習俗探索（フィールドワーク）は福岡県立大学大学院看護学研究科助産実践形成コース1年生5名と助産学領域の教員3名の合計8名で行った。

助産師は、その生命に積極的に関わる職業であるがゆえ、その根底にある助産師魂の中で生命尊重および生命に対する畏敬の念を大切にすべきである。その一つとして産育習俗を理解することが重要であると考えられる。また、妊娠・出産・育児は身体および心理的影響を受けやすく、安産祈願やお宮参りなど、産育習俗は心理的安寧を生み、女性と子どもおよび家族が本質的にもっている能力を最大限に発揮させる原動力にもなりうる。産育習俗探索（フィールドワーク）において、助産学生が妊娠・出産・子育てに関する人々の願いを知り、また身近に触れることで、妊産褥婦の深い理解につながると考える。

キーワード：産育習俗、宇美八幡宮、助産師教育

緒 言

その昔、子がこの世に産まれてくるには神の力が必要だと考えられており、かつての安産祈願の対象は社寺に関連したものに限らず、水の神、山の神、井戸の神など様々で、子産石・子安石などの石や子安清水と呼ばれる池水に祈ることもあった¹⁾²⁾³⁾。産育祈願の社として有名な福岡県宇美町にある宇美八幡宮は、平安時代までさかのぼることができるほど地域住民の信仰に厚く、福岡県だけでなく大分・佐賀など隣接県からも参拝者が訪れていた⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾。これは宇美八幡宮の祭神が神功天皇であることに関係している。紀元前三世紀頃朝鮮半島新羅の征伐に赴いた時、神功天皇が産気づいたため、腹帯に小石を挟ん

で陣痛をしずめ、帰国後無事に應神（おうじん）天皇を出産したことが『日本書紀』に記されている⁸⁾ことから、安産・育児の神として地元では親しまれている。現在も行われている代表的な産育習俗としては、安産祈願、帯祝、名付の祝の他に、生後三十日前後に氏神さまに誕生の奉告と御礼をし、氏子として今後の健やかな成長を祈願する初宮参り等が挙げられる。

戦後日本の周産期医療は著しい進歩を遂げ、妊産婦死亡率は2.8%、周産期死亡率は3.2%と妊娠～出産を通して命を落とすものはほとんど稀となった⁹⁾。一方、出産は晩産化が進んでおり、昭和50年は第1子出産平均年齢が25.7歳であったものが令和元年で

* 福岡県立大学看護学部／福岡県立大学大学院看護学研究科
Faculty of Nursing, Fukuoka Prefectural University
Graduate School of Nursing, Fukuoka Prefectural University
** 福岡県立大学大学院看護学研究科
Graduate School of Nursing, Fukuoka Prefectural University

連絡先：〒825-8585 福岡県田川市伊田4395番地
福岡県立大学看護学部
石村美由紀
E-mail: ishimura@fukuoka-pu.ac.jp

は29.6歳と上昇傾向にある¹⁰⁾。また、不妊を心配したことのある夫婦は3組に1組を超え、子どものいない夫婦では55.2%にのぼる¹¹⁾。「子は授かりもの」というが、状況は違えども、子を授かり、産み育てたいと希望する者たちはいつの時代でも神に祈りを捧げ、願うのである。そのような思いを知り、その心に寄り添うこともまた助産師の役割である。

産育習俗について知ることが助産師教育に必要だと考え、本学では以前より宇美八幡宮のフィールドワークを取り入れてきたが、教育効果などの考察はしていなかった。今回、日本助産師教育協議会から「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム2022年版」が出され、「B. 社会・環境と助産学」の中に「日本の出産や育児文化、産育習俗について説明できる」ことがこれからの助産師教育に必要だということがはっきりと示された¹²⁾¹³⁾ことを受け、本学が行う産育習俗探索（フィールドワーク）の実践を報告するとともに産育習俗を現地で学ぶ教育効果を考察することとした。

1. 助産師教育に取り入れる産育習俗

1) 望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム

日本助産師教育協議会から「望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム 2022年版」が出され、「B. 社会・環境と助産学」の中に「日本の出産や育児文化、産育習俗について説明できる」ことがこれからの助産師教育に必要だということが示された¹²⁾¹³⁾。助産学生たちが地域にある神社へ実際に赴き産育習俗を学ぶことで、より一層地域で生活する母子とその家族に寄り添い、また効果的な母子への健康教育を行うことができると考える。

2) 助産実践形成コースの講義概要

看護基礎教育検討会報告書¹⁴⁾において、助産師が修得する能力の充実が求められ、助産師教育の内容と方法についての見直しがおこなわれた。

令和4（2022）年からの新カリキュラムでは、産後うつ等の周産期におけるメンタルヘルスや虐待予防等への支援として、多職種と連携・協働し、地域における子育て世代を包括的に支援する能力、産後4か月程度までの母子のアセスメントを行う能力を強化することが求められ、指定規則では「地域母子保健」を現行の1単位に加えさらに1単位増え、合計2単位が示された¹⁴⁾。

本学大学院では、指定規則の「地域母子保健」に相当する科目として「コミュニティ助産学特論」および「コミュニティ助産学演習」を設定している¹⁵⁾¹⁶⁾。

「コミュニティ助産学特論」の講義概要は「母子とその家族が生活するコミュニティでの母子保健に焦点をあて、その未来をみつめた支援に必要な知識を深めることである。主な目標は、母子保健の変遷、関連法規、行政政策の現状と方向、福祉機関、民間非営利団体の活動など母子の健康を支えるシステムについて理解を深め、地域における母子保健の課題を明らかにするプロセスと実践的ヘルスプロモーションの展開について理解することとした。また「コミュニティ助産学演習」の講義概要は、「コミュニティ助産学特論で学んだ知識をもとに、地域の情報を収集し、地域が抱える母子保健上の課題を明確にする（地域診断）過程を学ぶ。また、地域というマクロの視点だけではなく、地域に生活する母子とその家族への援助について事例をとおして理解する。さらに、多職種との協働、連携の必要性を認識するために、多様な問題を有する母子への援助について学ぶ」こととした。

2. 産育習俗探索（フィールドワーク）の概要

福岡県立大学大学院看護学研究科助産実践形成コースの講義「コミュニティ助産学演習」の2コマとして「産育習俗探索（フィールドワーク）」を取り入れた。助産師として産育習俗や神事を理解し、地域で生活する母子とその家族を支援するための方法を探索することを目的としている。

1) 日程

2022年6月21日（火）10時～12時

2) 場所

宇美八幡宮（福岡県糟屋郡宇美町宇美1丁目1番1号）

3) 参加者

今回の産育習俗探索（フィールドワーク）は福岡県立大学大学院看護学研究科助産実践形成コース1年生5名と助産学領域の教員3名の合計8名で行った。

4) 宇美八幡宮の由来について¹⁷⁾

福岡県糟屋郡宇美町にある宇美八幡宮は、第十五代應神（おうじん）天皇御降誕の聖地であるといわれ伝えられている。神功皇后が應神天皇を安産で出産したこの地を宇瀨（うみ）と呼び、その後、宇美（う

み)と称されたことが宇美八幡宮の名前の由来である。

宇美八幡宮には主祭神である神功皇后・應神天皇の母子神、玉依姫命、住吉大神、伊弉諾尊の五柱がお祀りされており、「安産・育児」の信仰が特に篤く、多くの妊婦、産婦、母子が安産祈願や御礼参り（初宮詣）に参拝している。

3. 倫理的配慮

本文に掲載の人物写真については、第三者が写らないように配慮した。また、フィールドワーク参加学生に関しては、口頭および文書にて撮影・掲載の同意を得た。

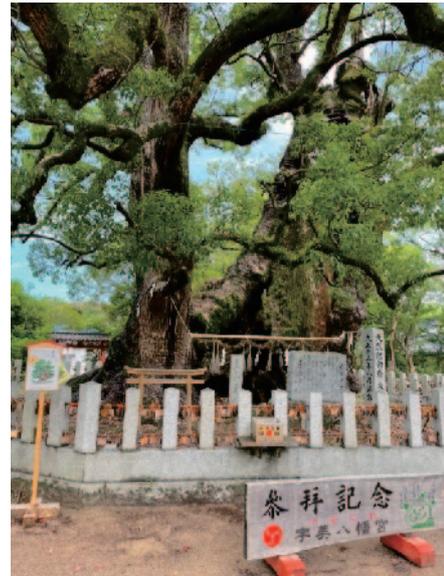


図2 衣掛（きぬかけ）の森

4. 宇美八幡宮（福岡県糟屋郡宇美町）の特徴

1) 湯蓋（ゆふた）の森・衣掛（きぬかけ）の森

「湯蓋の森」は、社殿に向かって右側、「衣掛の森」は社殿の左側にある老樹で、大正11年(1922)3月、国指定天然記念物¹⁷⁾として指定された。「湯蓋の森」は高さ十四メートルの楠の木で、八幡様の産湯を湧かした湯船の上に生い茂っていた楠の木々の最後の一本だと言われている。この辺りは楠の森だったといい、その話に基づき、森を湯蓋の森と呼んでいた。

「衣掛の森」は高さ二十メートルの楠で、これは八幡様の産衣を掛けたと言われている⁵⁾。「若葉の季節となれば、萌えるような御神威の『生命の息吹』を今日に伝えている¹⁷⁾」ように、安産・育児の守護神と言われる子安大神だけでなく、今まで参拝された多くの方々の生命や希望・願い、愛情などが存在する。

【図1】【図2】



図1 湯蓋（ゆふた）の森

2) 湯方社（ゆのかたしゃ）・子安の石

宇美八幡宮の本殿の左後ろに位置する「湯方社」では、八幡様の誕生の際に産婆の仕事を行った神を祀っており、祭神は湯方殿と呼ばれ、「助産師の神様」として知られている⁵⁾。そしてこの湯方社を囲むように子安の石が積まれており、安産祈願を終えた妊婦は「お産の鎮め」として石を一つ持ち帰り、出産後には別の新しい石に子の名前や生年月日、出生体重やメッセージを記録して子の健やかな成長を願い、持ち帰った石と共に納めるのが慣しとなっている。石は大きかったり小さかったり、色付きのものや絵が描かれたものなど様々である。中には双子の石もあり、同じ形をした石にそれぞれの名前が書かれているものを見ることができた。実際にフィールドワークを行った際に、子安の石を選んでいる夫婦の姿があった。九州圏内において圧倒的に信仰が強い宇美八幡宮⁵⁾でフィールドワークを行うと、一人一人の子に向けられた家族からの愛情や多くの思いを実感することにつながる。また学生が「自分が妊婦として訪れた際にはどのような石を選ぶのだろうか」と考えながら見学できたことで、学生自身のライフプランや将来について考える教育効果もあった。【図3】【図4】【図5】



図3 湯方社 (ゆのかたしゃ)・子安石の石碑



図4 湯方社と子安の石

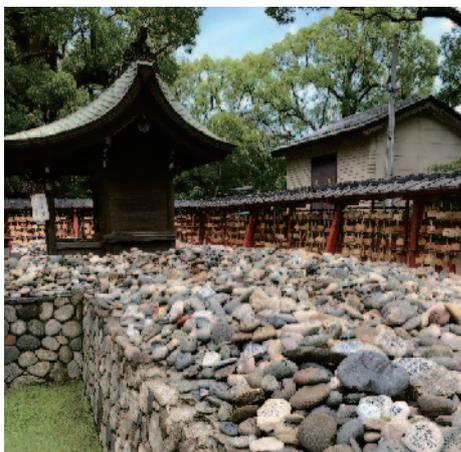


図5 境内に溢れる子安の石

ることで児が健やかに育つことを願い、多くの人が水を汲んで持ち帰っている。

現地では、木々に囲まれた涼しげな空気感と、清らかな水の匂いなど他の場所とは違った雰囲気や生命力を感じた。子が初めて浸かる湯に願いを込めながら、沐浴をするという文化が現在でも続いており、子を思う親の気持ちは何年経っても変わらない尊さがある。

産湯の水の前にある階段石が磨り減っていたことから、訪れた人々が産湯の水を汲みに来て、子の健康を祈った長い歴史が垣間見えた。現地で境内の中をじっくりと見ることでこれまでの歴史への理解が深まり、今後も伝承していきたい文化がそこにはあった。【図6】【図7】【図8】



図6 産湯の水 (うぶゆのみず) の石碑と案内板



図7 岩からしみ出る産湯の水

3) 産湯の水 (うぶゆのみず)

産湯の水は境内の左奥側、木陰の中にある。「應神天皇御降誕の時、此の水を産湯に用い給いしより今に至るまで妊婦拝受して安産を祈る」¹⁷⁾ と言い伝えがあり、應神天皇が生まれた際にこの湧き水を使って産湯をしたことから産湯の水と名付けられた。昭和30年(1955)に福岡県の指定有形民俗文化財に指定されており、現在でも産湯の水を用いて沐浴をす



図8 産湯の水の前でのフィールドワーク風景

4) 聖母宮（しょうもぐう）

湯蓋の森の後方に位置するのは聖母宮である。祭神は應神天皇の母、神功皇后である⁵⁾。本殿の迫力のある壮大な雰囲気とは異なり、母と子の絵が描かれている絵馬が並べられている様子も含め、心地よい穏やかな雰囲気が印象的であった。その雰囲気から、神功皇后が安産を願う母とその家族を見守るかのような様子が窺えた。また、聖母宮の前方には二か所の子安の石が置かれており、納められた石が新たな妊婦の安産祈願として持ち帰られ、妊婦たちは守護される。【図9】



図9 聖母宮(しょうもぐう)

5) 聖母子像

圧倒するかのように数多く並ぶ子安の石の前方に位置する石像は、静かに佇む聖母子像である。この聖母子像は神功皇后の石像である⁵⁾。「銀(しろかね)

も金(くがね)も玉(たま)も何せむにまされる宝(たから)子にしかめやも」と山上憶良による歌が石像に刻まれており、子より優れた宝はないと歌っている¹⁸⁾。そのような思いを持った聖母子像は、高さ約64cmと小さな石像ながらも子を抱き見守る母親の姿を石像としている。子安の石の前方にあることから、生まれた子そのものであるような石を守り、これから安産のためにと祈願する妊婦らを迎え入れるかのような位置に設置された石像である。【図10】

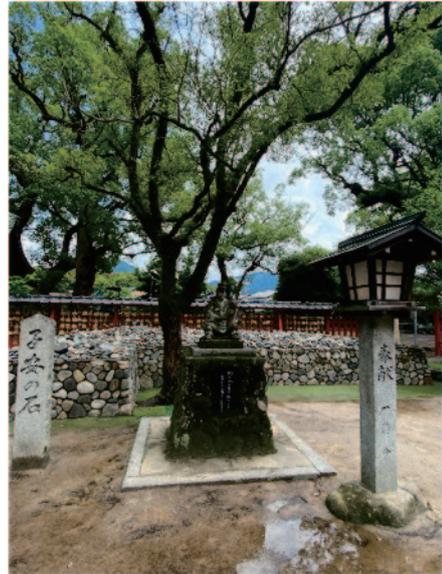


図10 聖母子像

6) 子安の木

子安の木は、本殿向かって左側にある神功皇后が應神天皇を出産する際にすぎたとされる木である。昭和30年(1955)には福岡県指定文化財「民俗資料」¹⁷⁾に指定されている。福西によると、子安の木には神功皇后が三韓征伐後に産殿をつくり、槐の木を折って、これに取りすぎたての出産し、安産したため、その枝を逆さにし、地にさし根付いた木の末裔だという伝承がある⁵⁾。実際の子安の木は、湯蓋の森や衣掛の森のような大木ではないものの、存在感を示していた。神功皇后が出産したとされる200年から現在までの1822年という長い年月の中で枝を伸ばし、成長してきた木自身の力強さと神功皇后の女性・母としての逞しさが両存する境内である。【図11】



図11 子安の木

5. 日本における産育習俗の変遷

妊娠や出産、成長の過程で、子供が無事に生まれ、丈夫に育つことを願う様々な産育儀礼やそれに関連する習俗・信仰・言い伝えなどは、出産場所が自宅から病院へ移行していく中で様々な変化を見せてきた¹⁹⁾。例えば戌(いぬ)の日を選んで着帯する「帯祝」があるが、平安時代から鎌倉時代初期までは卯(うさぎ)の日、鎌倉時代以降から江戸時代中期頃までは特に子(ねずみ)の日が多かったといわれている²⁰⁾。明治・大正の頃までは安産祈願と帯祝は別であったが、最近ではこの二つの習俗が一緒にまとめられ、夫婦や家族と共に神社に参拝し、イベントのような扱いとなってきている¹⁸⁾²¹⁾。帯祝の時期も妊娠3か月から7か月とその地域によって差があり、多くは妊婦の実家から岩田帯を贈ってもらっていた⁴⁾⁸⁾²¹⁾²²⁾。妊婦が神社に行き腹帯をもらい受けるようになったのは最近のことである。また、七夜の祝として現代でも生後七日目に名付の祝いのみが行われているが、古くはウブヤシナイといい、誕生の日から三・五・七・九の夜に祝い、産婦だけでなく近隣住民・親族に食事を振舞っていた。現代ではこの期間が入院中にあたるため風習は廃れている²³⁾²⁴⁾²⁵⁾が、安産や子の健やかな成長を願い、また産まれてきたことを寿ぐ気持ちはいつの時代も変わらない。

6. まとめ(産育習俗を現地で学ぶ教育効果)

日本助産師会は「助産師の声明・綱領²⁶⁾」の中で、「助産師の理念」として、「1. 生命の尊重、2. 自然性の尊重、3. 智の尊重」の3つを掲げている。生命は、親から子、子から孫へと受け継がれてきただけでなく、さらにそれ以前の長きにわたって繋がってき

た。助産師は、その生命に積極的に関わる職業であるがゆえ、その根底にある助産師魂の中で生命尊重および生命に対する畏敬の念を大切にすべきである。その一つとして産育習俗を理解することが重要であると考えられる。また、妊娠・出産・育児は身体および心理的影響を受けやすく、安産祈願やお宮参りなど、産育習俗は心理的安寧を生み、女性と子どもおよび家族が本質的にもっている能力を最大限に発揮させる原動力にもなりうる。産育習俗探索(フィールドワーク)において、助産学生が妊娠・出産・子育てに関する人々の願いを知り、また身近に触れることで、妊産婦の深い理解につながると考える。

今回報告した「産育習俗探索(フィールドワーク)」は、助産師として産育習俗や神事を理解し、地域で生活する母子とその家族を支援するための方法を探索することを目的として実施した。学生は、「現地で境内の中をじっくりと見ることでこれまでの歴史への理解が深まり、今後も伝承していきたい文化がそこにはあった」と言い、産育習俗を学ぶことは文化や歴史を知ることにつながるということがわかった。また、実際にフィールドワークすることで、「今まで参拝された多くの方々の生命や希望・願い、愛情などが存在しているように感じる時間だった」「力を与えてくれるような印象」という感想が学生から出た。このように学生たちは実際の妊産婦が感じるであろう印象を得ることができていた。妊娠・出産は心理的側面が大きく影響するため、助産学生が妊産婦の感情と類似の感情を抱いたことにも価値があったと考える。

今後は、フィールドワークの講義日を、参拝者が多いと予測される「戌の日」に設定するなど、時期、内容について吟味し、十分な効果があったかについては、学生のレポートを目的外利用として研究に活かし、しっかりと検証していくことも検討したい。

本研究において、開示すべき利益相反は存在しない。

文 献

- 1) 田口裕子. 現代における安産祈願の実態とその背景. 神道宗教 2011 ; 107-129.
- 2) 上笠一郎. 子育てこころと知恵—今とむかし—. 東京: 赤ちゃんとママ社 2000.
- 3) 板橋春夫. 出産 産育習俗の歴史と伝承「男性

- 産婆」. 東京：社会評論社. 2009.
- 4) 恩賜財団母子愛育会. 日本産育習俗資料集成. 東京：第一法規出版. 1975.
- 5) 福西大輔. 産育祈願に関わる八幡の信仰：宇美八幡宮. 熊本大学社会文化研究 2008 ; 6 : 291-299.
- 6) 中村正夫. 豊増幸子. 山口麻太郎他. 九州の祝事. 東京：明玄書房. 1978.
- 7) 筑紫豊. 日本の民俗 福岡. 東京：第一法規出版. 1974.
- 8) ムカルジーヒヤ. 産育儀礼における腹帯の実態と動向の検討－愛知県名古屋市の社寺の事例から－. 年報人類学研究 2021 ; 12 : 247-258.
- 9) 厚生労働省. 令和2年(2020)人口動態統計(確定数)の概況(令和4年2月25日). <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/kakutei20/index.html> (2022年8月28日閲覧)
- 10) 厚生労働省. 令和3年度「出生に関する統計」の概況(令和3年7月30日). <https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/tokusyu/syussyo07/dl/gaikyou.pdf> (2022年8月28日閲覧)
- 11) 国立社会保障・人口問題研究所. 2015年社会保障・人口問題基本調査(結婚と出産に関する全国調査)現代日本の結婚と出産－第15回出生動向基本調査(独身者調査ならびに夫婦調査)報告書－(平成29年3月31日). https://www.ipss.go.jp/ps-doukou/j/doukou15/NFS15_reportALL.pdf (2022年8月28日閲覧)
- 12) 全国助産師教育協議会. 望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム 2020年版. 2020. https://www.zenjomid.org/wp-content/uploads/2021/02/202006_corecurri_thinking.pdf (2022年8月28日閲覧)
- 13) 全国助産師教育協議会. 望ましい助産師教育におけるコア・カリキュラム. https://www.zenjomid.org/wp-content/uploads/2021/02/202006_corecurri.pdf (2022年8月28日閲覧)
- 14) 厚生労働省. 看護基礎教育検討会報告書(令和元年10月15日). <https://www.mhlw.go.jp/content/10805000/000557411.pdf> (2022年8月17日閲覧)
- 15) 福岡県立大学大学院看護学研究科. 助産実践形成コース、コミュニティ助産学特論 シラバス. <https://fpu.today/Care4Web/SYLD210Init.do> (2022年8月17日閲覧)
- 16) 福岡県立大学大学院看護学研究科. 助産実践形成コースシラバス、コミュニティ 助産学演習シラバス. <https://fpu.today/Care4Web/SYLD210Init.do> (2022年8月17日閲覧)
- 17) 宇美八幡宮 公式ホームページ. <http://www.umi-hachimangu.or.jp/> (2022年8月17日閲覧)
- 18) 小島憲之, 木下正俊, 佐竹昭広. 完訳 日本の古典 第三巻 萬葉集(二). 初版 東京：大日本株式会社. 1984.
- 19) 宮里和子. 産育をめぐる慣習の伝承と変容に関する研究. 民族衛生. 1991 ; 189-201.
- 20) 鎌田久子. 菅沼ひろ子. 坂倉啓夫他. 日本人の子産み・子育て－いま・むかし－. 東京：勁草書房. 1990.
- 21) ムカルジーヒヤ. 愛知県都市部における産育にまつわる儀礼と信仰の現状－熱田神宮の事例を中心に－. 年報人類学研究 2020 ; 11 : 143-153.
- 22) 安井眞奈美. 天理の出産習俗－「奈良県風俗誌」をもとに. 天理大学考古学・民俗学研究室紀要 2009 ; 10 : 48-62.
- 23) 櫻井秀. 大日本史講座第十五巻 日本風俗史. 東京：雄山閣出版. 1929.
- 24) 高田十郎. 妊娠・出産・育児に関する民族. 奈良：奈良県社事業協会. 1938.
- 25) 松下石人. 三州奥都産育風俗図絵. 愛知：正文館書店. 1937.
- 26) 日本助産師会. 助産師の声明・綱領、助産の理念. <https://www.midwife.or.jp/midwife/statement.html> (2022年8月25日閲覧)
- 受付 2022. 8. 31
採用 2022. 11. 8